

TruPhase の活用(3) —音源の位相確認(3)—

1. はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(1)に引き続き CD の位相確認を行います。この機会にバッハの作品の CD を聴き直していきます。

2. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(1)では、下記経路による CD 音源の位相確認を行いました。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

今回は、次の経路で CD 音源の位相確認を行います。

SA11-S2(GPS-777 よりクロック入力)→CCV-5(GPS-777 よりクロック入力)
→Brooklyn DAC+(LINE 入力)→TruPhase→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、[音源の位相チェック実験\(31\)](#)で使用したバッハのヴァイオリン曲の作品で下記のとおりです。

HiQ RECORD HIQXRC9

J.S.Bach ヴァイオリン協奏曲集 結果：逆相
ユーディン・メニューヒン(Vn・指揮) Bath Festival Orchestra

F.M Inc. TC-016

J.S.Bach ヴァイオリン協奏曲集 結果：逆相
ダヴィッド・オイストラッフ(Vn・指揮) ウイーン交響楽団

MEISTER MUSIC MM-3043

J.S.Bach ヴァイオリン協奏曲集 結果：正相
フェデリコ・グリエルモ(Vn) 新イタリア合奏団

ARCHIV UCCA-1100

J.S.Bach ヴァイオリン協奏曲集 結果：正相
ジュリアーノ・カルミニョラ(Vn) コンチェルトケルン

3. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうか焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相

反転させた状態で **TruPhase** のヴォリュームを固定し、**Brooklyn DAC+**でのヴォリュームでの調整だけになりました。そして、**Brooklyn DAC+**では位相反転させないで、**TruPhase** での位相反転有り無しで聴いていきます。

メニューヒン盤は、位相反転しますと、散漫で騒がしい感じが消え音の焦点があつてきて、メニューヒンの爽やかなボウイングが聴かれます。

オイストラップ盤は、位相反転しますと、捉えどころのない感じが消えて定位がはっきりしてきて、オイストラップの端正な演奏が聴かれます。

グリエルモ盤は、位相反転しますと、定位が曖昧になって過度に広がり感がでます。位相反転しないとイタリアのバロックアンサンブルらしい華やかなバッハです。

カルミニョラ盤は、位相反転しますと、定位が曖昧になって過度に広がり感がでます。位相反転しないとカルミニョラ得意の切れ味のよいボウイングがしっかり定位して楽しめます。

グリエルモ盤は 2014 年の発売、カルミニョラ盤は 2013 年の発売ですので、正相であることが領けます。

新イタリア合奏団、カルミニョラ、コンチェルトケルンのいずれも曲は違いますが、生演奏を聴いているので、位相があうと、記憶を呼び起こさせるようなところがあります。

なお、音質的には、**VRA-7**や**USBダンパー**、**バランスアナログアキュライザー**などの効果に加えて、**Magnetic Wave Guide**の導入(8)において電源を採るタップの整理を行ったことが相まって、以前とは比べものにならないくらいクオリティが上がっています。

4. まとめ

TruPhase での位相反転と位相チェック実験(31)における **Brooklyn DAC+**での位相反転の結果は、同様の傾向になることが分かりました。

以上